

兵庫県に新しく分布の明らかになったシダ

白 岩 卓 巳

兵庫県シダ分布調査をしているうちに、新しく分布の明らかになったシダを数種確認することができたので報告する。

1. *Dryopteris sparsa* (Ham) O. Kuntze

ナガバノイタチシダ

淡路島にはすでに、イシガマ、ケブカフモトシダ、クジャクフモトシダ、マツザカシダなどの暖地性シダが自生していることは明らかになっている。このうち、特にイシガマは洲本から由良、黒岩方面にかけて日かなり広い地域に群生していることが調査から判明した。

この調査をしていた1975年11月3日、由良の民家近くの石垣に2株のナガバノイタチシダを見つけた。兵庫県の植物目録にも記載されていない新しいシダである。

しばらくは、その付近を詳しく調べることもせずだったが、気にもなるので、翌年の3月7日、由良町天川の谷を歩き、群生しているこのシダを見つめることができた。

このシダは、日本では亜熱帯の林下から下部暖帯の林に普通に自生するものであるが、近畿地方では、多く自生する和歌山・三重県を除き、京都・大阪にもすでに自生地が明らかになっている。

2. *Asplenium wrightii* Eat. クルマシダ

まだ、全く記録にも自生の可能性の少ないこの暖地性のシダと、丹波の山中で出会うとは夢にも思わなかった。1976年4月5日、水上郡山南町にシダ調査に出かけたとき、岩場の下部にこの常緑のシダがついているのを見る。近寄ってみるとクルマシダである。30株ほど自生している環境に立って、自分がいま、三重県の尾鷲（暖地性シダの宝庫）か、屋久島の谷に入っている錯覚をおぼえる。

京都府の南部の各地に点在しているので、兵庫県に自生地がみつかったとしても不思議ではないが、予想もしていなかっただけに感激の出会いだった。1977年8月、右上の写真撮影に訪れたところ、付近の様子にはや変化がみられ、心配である。

3. *Athyrium oblitescens* Kurata

サキモリイヌワラビ

豊岡市高屋に変わったイヌワラビが自生すると聞いていたので、1976年1月2日、降雪の当地を訪れ、それがサ



写真1 クルマシダ

キモリイヌワラビであることを確かめる。常緑のタニイヌワラビと似て、葉柄はやや太く、赤味がかり、小羽片はヒロハイヌワラビ状のイヌワラビである。この種については、まだ不明なことが多いが、京都から西の日本海側に多く自生することがわかっている。

1976年10月31日、丹波（水上郡）でもかなり群生しているのを見つめる。中国山地の南側に分布することは稀である。

4. *Polystichum igaense* Tagawa

チャボイノデ

京大の研究室にいた塚田さんから、1976年10月、六甲山でチャボイノデをみつけたという報告を受け、さっそく、六甲山を訪れる。（10月11日）、頂上付近の谷筋である。

このイノデは、イノデモドキと非常によく似ており、非常に同定しにくいシダであるが、このシダのタイプ産地の三重県伊賀の谷で採集して、鱗片のねじれ、小羽片

の形などの特長をつかんでいたもので、現地ですぐ見つけることができた。何回も歩いた場所であったが、全く見落していたシダであった。

このシダは富士山麓にはかなり群生しているが近畿では、三重県を除いて、奈良、和歌山にわずかに自生するだけである。

5. *Dtyopteris gymnothylla* (Bak.) C. Chr.

サクライカグマ

西播地方は、兵庫県でも、植物分布上、やや特異な傾向にあることはシダ分布からもうかがえる。

オシダ属のサクライカグマが、赤穂郡上郡櫛田の滝の上部に自生していると聞き（京大大学院留学生、佐藤さん採集）、1976年11月21日訪れる。谷筋だが、乾燥のひどい岩上に生えている。普通のシダの自生環境とは全く異っており、あらためてシダ自生の環境について考えさせられる。

葉身は全体として五角状で、最下羽片に長い柄をもつこのシダは、関東各地にはかなり自生しているが、西日本にはまだ2か所しかみつかっていない。その一か所は京都で、以前に児玉務氏が見つけれられ、いまもあることが確認されている。もう一か所は、広島県で、3年ほど前に発表されている。詳しく調査してみると、案外広い範囲に分布しているのかもしれない。とにかく、ここは

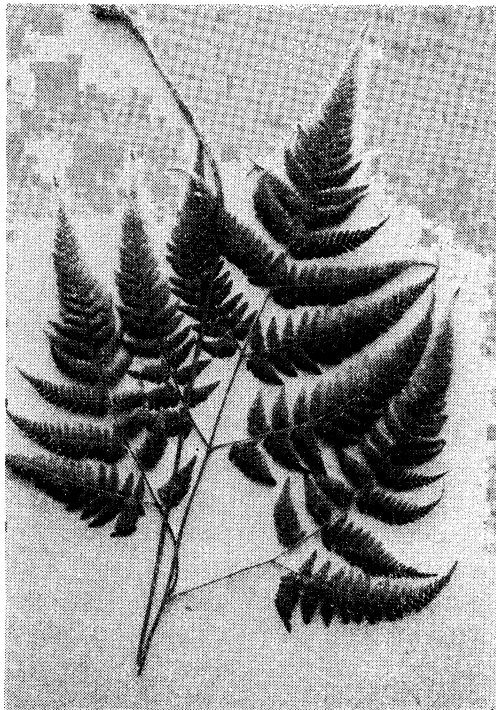


写真2 サクライカグマ

西日本第3の自生地である。

6. *Woodsia manchuriensis* Hook.

フクロシダ

丸い袋状の包膜をもつイワデンダ属のこのシダは、北海道から九州まで広く分布する。近畿地方では大阪を除く他の府県に、隣りの岡山・鳥取県にも分布することがわかっており、兵庫県にも当然自生しているはずのものであった。

1976年5月15日、母が他界して、初めての里帰りの途中、播但線寺前駅で下車し、峰山までの谷筋を調べに立ち寄る。ミヤマクマワラビ、イワイタチシダなどのシダやエンレイソウの自生する付近の岩場に新芽をのぼしかけている数株のフクロシダをみつける。おウクロシダなんだな、心の中でつぶやきながら、谷を引き返す。予期せぬ出会いだった。

7. *Dryopteris varia* (L.) O. Ktze

ナンカイイタチシダ

暖地性のこのシダは近畿の南部には分布するが、兵庫県では確かな採集の記録がなかった。イタチシダのなかまの同定がやや困難なことも重なっていたからだろう。わたしが、このシダを兵庫県で最初にみたのは、一番暖かい気候の淡路島である。



写真3 ナンカイイタチシダ

1976年12月12日，津名郡北淡町藁浦，1977年2月13日南部の三原郡成相，1977年5月14日黒岩で自生を確認した。

常緑性のこのシダは，葉は革質で，葉身の上部は著しく急に狭くなって長くのびること，葉柄基部の鱗片は長く，赤褐色で光沢があることから見分けがつく。

近畿では，和歌山，三重県のほかは大阪南部で採集されている。

8. *Dryopteris indusiata* (Makino) Makino et Yamam. ヌカイタチシダモドキ

小金岳で荒木英一氏がヌカイタチシダマガイを採集された記録がある。歩くことの少なかった丹波の山に数回続けて足を運び，ヌカイタチシダモドキに接したのは1976年9月23日永上郡永上町である。

カミガモンダ，ヌリトラノオ，ミヤマノコギリシダ，オオフジシダ，サキモリヌワラビ等を採集しながら植林下を歩いていると，岩上にこのシダが2株だけ生えているのに目がすいつけられる。荒木氏以来，やっとヌカイタチシダマガイに出会うことが出来たという喜びで，その日はいっぱいだった。

標本を作成し，東大に送ったところ，倉田悟先生の同定結果はヌカイタチシダモドキということだった。

この両者の違いは鱗片にあって，ヌカイタチシダマガイの鱗片が黒味のない淡色であるに対してヌカイタチシダモドキのそれは黒色または黒褐色である。どちらも葉身は，2回羽状複生でトウゴクシダ状である。

暖地に多く分布し，近畿では，和歌山，奈良，三重に多いが，他の府県での記録はない。

9. *Dryopteris indusiata* (Mak.) Mak et Yamamoto f. *Simasakii* var. *Paleacea* H. Ito アツギノヌカイタチシダマガイ

葉柄・葉軸に著しく鱗片が密生し，サイゴクベニシダとよく似るこのシダは，最下羽片の前側の小羽片が著しく長いこと，葉面のつやがないこと，鱗片の辺に突起がでることから，サイゴクベニシダと区別できるが，まだよくわかっているシダとはいえない。

1976年2月28日，神戸市垂水区平野町の古生層の岩の露頭地にこのシダがついているのをみつける。最初はサイゴクベニシダの秋葉ではないかとも思ったが，大阪自然史博物館の所蔵標本やタイプ産地金華山（岐阜県）の標本と比べて，アツギノヌカイタチシダマガイにまちがいないことがわかる。

近畿での自生地はよくわからないが，兵庫県では他に網干・坂越など瀬戸内の暖い海岸近くの標本がこのシダのようだ。



写真4 アツギノヌカイタチシダマガイ

10. *Plagiogyria adanta* Bedd.

タカサゴキジノオ

栄養葉の中部から下部羽片は，特に上側で中軸に流れつき，頂羽片がはっきりしない，などの特徴をもつこのシダは，キジノオシダ，オオキジノオに比べて暖地に多い。

近畿地方では，大阪・滋賀を除き他の府県にみられるが，兵庫県では，淡路ではじめて，1977年洲本市猪鼻谷で，宗清文氏によって採集された。

以下は，分布の明らかになった雑種シダである。

11. *Dryopteris* × *watanabei* Kurata

フジオシダ

オシダとオクマワラビの雑種である。1976年10月10日多可郡加美町に採集に出かけ，ナガホナツノハナワラビ，タカオシケンシダをみて，オシダの群生地に足を入れる。

ふと，最近，京都の周山街道などでみつかっているフジオシダが姿をあらわすのではないかと，オシダ1株1株に注意を注いで歩く。最後の1株が普通のオシダよりもやや小株で，鱗片はオシダ状，羽片はクマワラビ状のシダである。フジオシダだととっさに判断したが，オクマワラビの特徴といえば孢子のうが上部からやや下部羽片にまでついていることで，あとはクマワラビ状の特徴をもっている。フジクマワラビ（オシダ×クマワラビ）ではないかと考えはじめたが，標本を倉田先生に送ると孢子がかなり下部羽片までつくことからフジオシダという返事だった。

今年（1977年）の8月にも現地を訪れ，付近を調査したが，付近にはオクマワラビはなく，孢子のうのかなり下部羽片までつくクマワラビのあることから，まだ，フジクマワラビでないかという疑問が残っているシダである。

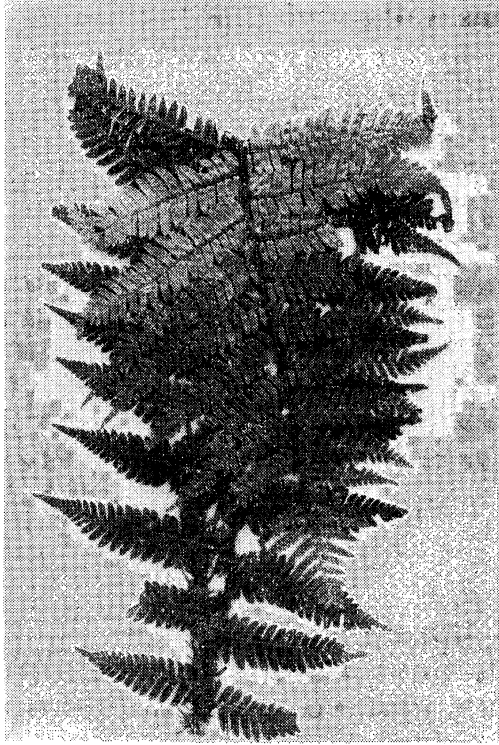


写真5 フジオシダ

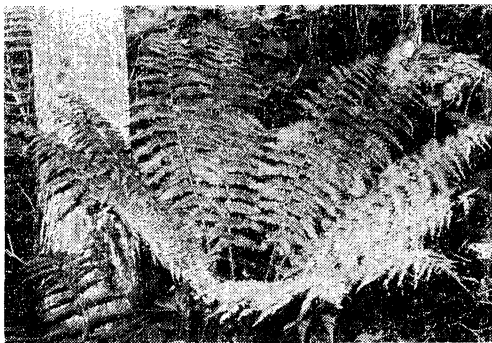


写真6 フジオシダ

**12. *Arachniodes sinplicior* (Makino) Ohwi
var. *variegata* Hort × *A. exilis* (Hance)
Ching ホソバハカタシダ (斑入り)**

1975年8月25日、西播相生の奥地に出かける。シイ、カシなどの照葉樹林の林床には、ホソバカナワラビをはじめ、カナワラビ属のシダが多い。

カナワラビの雑種についても、多くの疑問があるが、このホソバカナワラビとハカタシダの雑種については、根茎はやや長く葉を疎生し、小羽片の切れ込みはハカタ

シダよりやや深く切れ込むなどから両親のシダと明らかに区別できる。

この日採集したホソバハカタシダには、明らかな白斑が見られるのである。ハカタシダの斑入りはそうめずらしくないが、ホソバハカタシダの斑入りは、日本でこの地の記録がはじめてである。その後、京都・奈良でも、この斑入りシダの群落がみつかった。このシダをハリマカナワラビと呼んでいる人もいる。

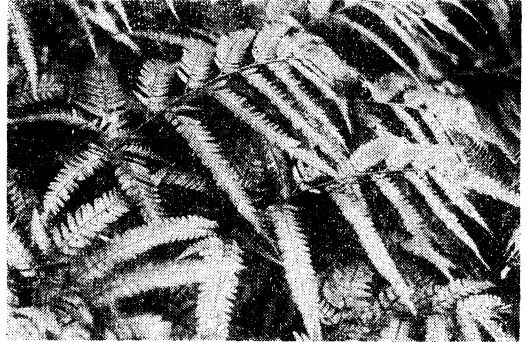


写真7 斑入りホソバハカタシダ

13. *Polystichum* × *hakonese* Kurata

ハコネイノデ

アイアスカイノデとサイゴクイノデの雑種であるこのシダは、京都大原、奈良の室生をはじめ近畿各地に分布していることがわかってきているが、兵庫県では長い間見つけることができなかった。

1976年8月24日、丹波の妙高山の調査に出かけたとき、当地でやっと2株みつけた。また、オンガタイノデ(サイゴクイノデ×ツヤナシイノデ)も自生している。

14. *Athyrium* × *Kidoanum* Kurata

ユノツルイヌワラビ

ヒロハイヌワラビとホソバイヌワラビの混生するところのできる両者の雑種である。1976年8月朝来郡山東町粟賀神社、1976年9月上郡水上町香良で採集する。

15. *Asplenium normale* Don × *A. oligophlebium* アイヌリトラノオ

カミガモシダとヌリトラノオの雑種である。両者の混生するところのできる。1976年9月上郡水上町で採集する。

今後も調べていきたい。いろいろとお教えてください。